



東北 復興日記

まだまだ

▶▶ 230



くりはらツーリズム
ネットワーク事務局長

大場寿樹さん

ザを知る喜びを感じながらも、市場原理では地方の価値あるワザが持続できずに消えていくと感じる場面が多くありました。さらに、震災による建物の損壊や原発事故に伴う放射能汚染は、ワザが失われていくことに大きな影響を与えています。

現在、「くりはらツーリズムネットワーク」という市民団体で働いています。食文化を学ぶ調理実習や農作業、モノづくり、自然観察など、多様な体験プログラムを年間百回以上実践しています。市場原理では維持できない地方のワザを体験プログラムに組み込むこ

生まれてこの方、宮城県栗原市という農村地域で暮らしています。それなのに、地元ワザ

(技)を知らない—と、社会人になってから劣等感を抱いていました。おじいさんが手品のようにわらで縄をなったり、おばあさんがつきたての熱い餅を手で切ったりする姿に、ただ見とれるばかりでした。

地方のワザを体験して

私のような四十代以下の世代の多くは、地方で暮らしていても、

欲しいものは「買う」のが主な実現の手段です。でも、年配といわれる方々、特に農家の高齢者は「あるモノで作る」ことができるのです。

私の場合は、劣等感が強い憧れに変わり、ワザを見ることに魅了されていきました。そうして、ワ

とで地域の価値を醸成していく試みです。

これからの季節、越冬するため遠くシベリアから来るマガンなど渡り鳥の観察が、栗原市と登米市にまたがる伊豆沼・内沼で最盛期を迎えます。マガンが飛来するには、安心して過ごせる湖沼と餌場となる田んぼが必要です。田んぼを作り続けることが人のためだけではなく、他の命にも良い影響を与えているのです。マガンの早朝の飛び立ちや夕方のねぐら入りは人生で一度は見たいと思うほどの絶景ですが、その絶景は地方の人々の普段の暮らしがあってこそ。

東京から新幹線で約二時間の小旅行にお越しください。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。



渡り鳥が越冬する宮城県の伊豆沼